湖畔の悲歌

文學士澤村胡夷著

湖畔の悲歌

文學士

胡寛著

文港堂發行

湖畔の悲歌

文學士 胡寅著

文港堂發行

湖畔の悲歌

文學士 澤村胡夷 著

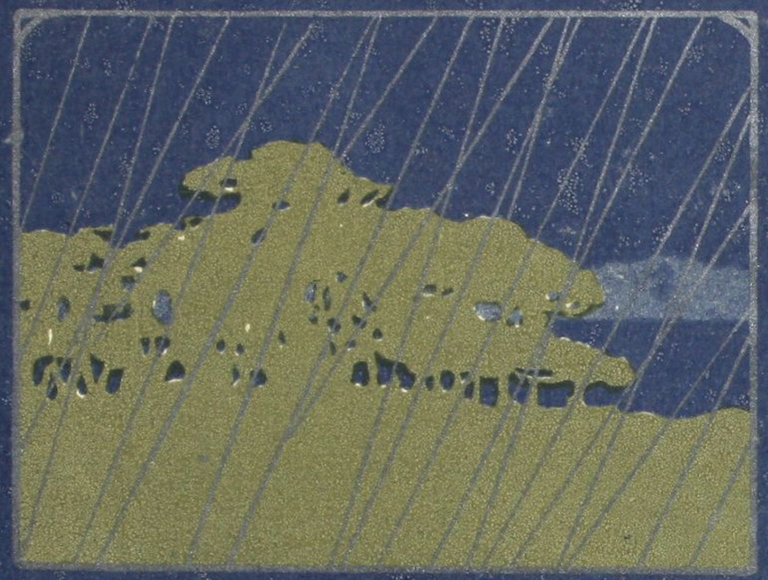
湖畔之悲歌

湖畔之悲歌

胡秉作

R

T. Sone



雨降り時間

湖畔の悲歌

澤村胡夷著

この歌巻を北海の叔父君に捧ぐ

『湖畔の悲歌に題す』

鳩の湖に漣立ちて倒に醮せる金龜の彎影泛びては去り、去りては泛ぶ、其美はしき影の紋ぞ軈て胡夷子の歌とはなれる。若し夫れ一輪の寒月中天に懸かりて金鱗湖心に漂ふの時、子の曲は當に鳳簫の吟をなすべ

く、將た伊吹颯凄まじく洶瀾怒濤天を搏つの時、予の調は蓋し蛟龍をして躍らしめむ。宇宙は悠久一味にして而も錯綜無限なり。胡夷子先づ其靜を捉へて後、其變を詞曲に發すること縱横自在なれや。

丙午孟冬　　洛陽の華水生

目　次

湖畔の悲歌

一の巻

(上)黑　髮……二頁

(下)比良の嵐……八頁

二の巻

(上)森の館……一六頁

(下) 燈明臺……三三頁

三の巻

(上) 紅　炎……五二頁
(下) 波がしら……六〇頁

銀露集

壇の浦……六七頁
縫　針……七五頁
萬兩草の歌……八〇頁
梅雨晴……八五頁
遠　雷……九〇頁
夕ぐれ……九七頁
棕梠の花……一〇三頁
孤　螢……一〇六頁
野にて……一〇九頁
夏　草……一一二頁
鬼菱の夢……一二二頁
病　狗……一三一頁

宇治橋のほとりにて……一四一頁
菱の刺……一四六頁
林下のたむろ……一四九頁
隱れ家……一五二頁
杉の歌……一五七頁
磯曲に……一七三頁
目覺めて……一七五頁
海の歌……一七七頁

序文　嶋華水
捜畫及表裝　菊地素空
裝畫『雨』　永山美樹

湖畔の悲歌

澤村胡夷著

森に住みけむ孤兒のうら若き女と、水の上なる逞しげの舟子と、月無き夜な夜な、燈臺の光をたよりに、波上のはか無き逢瀬を樂しみしが、春の一夜、たまたま、燈臺のあかりとぼらず。折ふし起りし暴風に、あはれ、二人の舟はやぶれたゞよひぬ。

いかにかしげむ。燈臺の番者なる女も、其夜、行方知れずなりにしが、人は語傳へぬ。漂へりし三人の骸を燈臺より程遠からぬ波間に見にけりとも。

春の其夜頃、嵐烈しく浪高し。知らず誰が呼びつぎにけむ、その頃よりぞ三人の魂の荒ぶなる比良八講の嵐ぞとも。

一の巻

(上) 黒髪

女心(をんなごころ)を

瞥(たゞ)ふれば、
透(す)いて見(み)せたる
薄氷(うすらひ)か。
生温(なるま)き光(ひかり)に
溶(と)けそめて、
烈(はげ)しくあつき
日(ひ)にてらば、
珠(たま)とくだけむ
若葉蔭(わかばかげ)。

男の胸を
たとふれば、
燃にて見せたる
野馬か。
光流るゝ
沼をいで、
南に北に
かけめぐり、

やがては消ねむ
花の床。
男の胸と
人の世の
女ごゝろを
垂髪に、
結ばゞいかに、
花の蔭。

樂しとゑみし
春の夜の
よろこびやがて
うすらぎて、
ためいき荒く
打嘆き、
嫉妬の刺の
座に堪へじ。

ああ、ああ、刺に
黒髪の
もつれを、いつか、
ほどき得む。
霜夜にかたき
きりきずの
冷血のあとを
うかゞはゞ、
悲しからずや

女子よ。

(下) 比良の嵐

薄黄の雲は卷返り、
荒振神の翼あげて、
二つに裂きし黒雲の、
浮橋、そゞろ、踏外し、

狭霧の海に降來て、
憤怒を刻む形體に、
吾世の人を呪ふかと、
白藻の花はしほたれて、
礫の如く蝶蜂の
水面に落ちし夕げどき。

あらき呼吸に毒づきて、
黑ばみ渡る森、林、
梢の青葉まきあげて
ああ、
翔り來ぬ。
翔り來ぬ。
『この界、奈落の底に落ちよ。

罪と汚穢と歡樂と
暗きに沈め、かくて唯、
禍、あれな、人の子』と、
飛散る雲に放言して、
翔り來れり、大嵐、
逆つる眼、怒らして、

黑髪ながに搔亂し、
踏とゞろかす白雲に
鬼形は聲をあらゝげて、
燈火あげよ火神と、
暗き水門の彼方なる
岬を遠く指ざせば、
疾風は雲をまきあげて、

飛ぶ火をなぐる荒神に
闇たてながし隔てたり。

白衣ににぢむ唇の
血潮に風は腥く、
碎くる、額の黑雲を、
領巾振り拂ひ狂ひ飛ぶ

二人の比賣をかきいだき、
鬼形は闇をたゝらかし、
炎をあげて呼吸づけば、
地は轟轟と鳴りどよみ、
黒ばみがちの大琵琶に、
逆巻起ちぬ、荒男波。

二人の比賣は絶望の
呼吸づき荒く、くづをれて、
遙かにめぐる月の輪の
光は青く照榮にぬ。
ふたゝび、嵐まきあげて、
白雲なだれ、横なぎに、
投げぬ。飛ばしぬ。雨つぶて、

下には比良の八講の
嶺おろし來ると恐怖きて、
漁村のかまど、火を絶ちぬ。

二の巻

(上) 森の館

—樹間を　ぬぐふや
姿　淡ろ
水際に　急げり。
飢うる　しかの
尾の上の　皺襞を
望む　如く
清しき　眸を
闇に　こちし—

白雪、とゞろと崩れおちて、
ゆき消のひゞきは嶺に起り、
湖上を渡れば、風はぬるく
かしこの島かげ、こゝの入江、
欵乃、長閑かに湖を越にて、
白帆は水面に浮びいでぬ。
春風、しづかに磯に吹けば、

白梅、浦和にかをりそめて、
漁村に棚引く烟うすう、
春日は湖畔の山に眠る。

比良の嶺、間近の里につゞく
櫟の森にも花は咲いて、
くづれし館の四方をめぐり、

梢を縫ひて小鳥歌ふ。
(女主は孤兒、秋とよびて)
里人御館の姫といひし
昔の面影、いまは亡せて、
藻苅の小舟に櫂と棹の
手なれし二十の春ぞめぐり、
いつしか悲しく思ひなやむ。

鬱金の雲の森に近く、
白き光を漏らす日ぐれ。
お秋は藻苅の舟を綱ぎ、
輕う砂路に脚痕をみだし、
幼な思ひを水に浮けて、
崩れ勝なる雲に愁む。

宿世をかしき空の雲を、
形象同じと湖にみれど、
二十歳、悲しく胸にしのび
夢に秘めたる姿ならぬ。
森の館は櫟隱れ、
ああ、見よ、暮色に
棟はゆがみ

孤兒、まつよと
寂びて立てり。

暗き小春の香しめて
裏の切戸の、きしり、靜か。
茱萸の葉蔭におつる水の
迎ふは音のみ、――闇に震ふ。

『砂に　愁みて
ふける思ひ、
亡母は　草葉に
宵を守り、
幸よ　あれがと
祈るらむに、
今宵の　聖燈

遲うなりぬ。
疾くぞ』としだれし
帶をしめつ。
滑入りたる肩は瘦せて、
森の館の燈、低う
松と櫟のかげに動き、
波は浦和に一つ寄せぬ。

藻苅一日に疲れ果てゝ、
椽にかゝりて暫し憩ふ。
簀の子朽ちたる庭の籬、
森の彼方に入江、暮れて、
心、夢路に走る如く、
闇に消ゆく白帆一つ

一つ白帆、さりな、一つ
旅の朝の門に隱る
若き愁にいたむ如く
見返りがてらや、進行、遲う
この日倦みたる帆脚なづみ、
一里彼岸に錨なげて、
森の館の眸惹きぬ。

見よ、あな、
旅なる船は來り
若き心を躍らしむよ。
（湖の面に住めるものは、
——青藻くづしの鯉にあらで——
船と、小島と、藻花、鷗、

白帆隱れに動くものは
若き船人―舟子ひとり)
闇はあし間に船を嚙めば、
今し岬に燈照りて
細き眸を辿らしめぬ。
梢若葉に小鳥鳴いて
その夜のねぐらを選ぶ如く

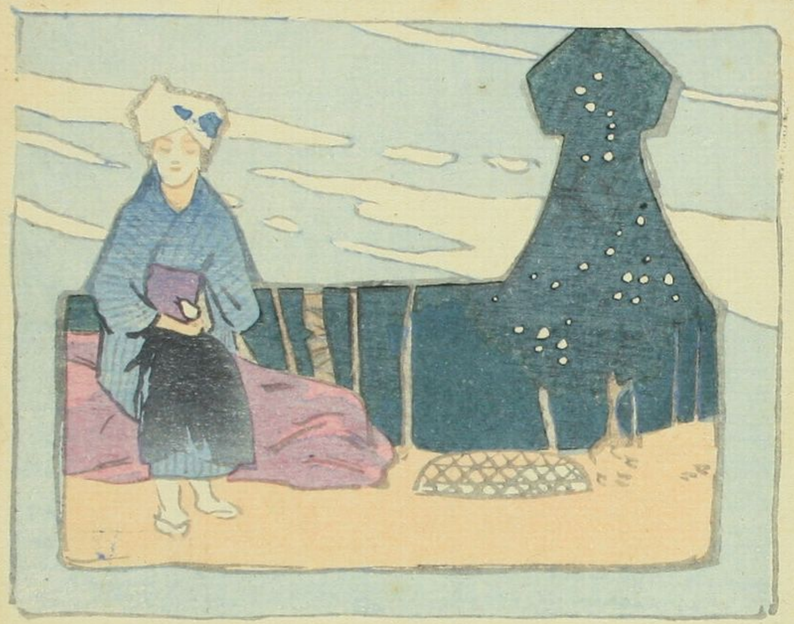
星は眞砂の露をうてり。
宵闇新芽の香みちて
音なく微風にゆるゝ梢―
館戸くゞりて人はいでぬ。
樹間をぬぐふや姿淡う、
水際に急げり。飢うる麑の、

尾の上の嫩葉を望む如く
清しき眸を闇にこらし、
沖なる白帆を遠くのぞみ
小躍り丘越に白き砂の
うねりに下りて消ゆる姿。

銀蛇かゝめに闇を流れ、

さ揺ぐ燈火に(たより得つゝ)
朝、消ぬらむ夢にまがひ
藻苅小舟は岸を離れ
麗人、打乗せ波に入れば
彼方、漁村の徑にちかく
新芽、萌いたる草の繁
畑鼠は森を横斷り

古き館に急ぎ入つて、
『白帆　入江に
見ゆる　夕べ
人は　在らず』と
高く叫び、
裏の納屋戸の隙をくゞり
女主顔なる振を眞似ぶ。



—お島は　寄來を
膝に　抱き
震へる　指して
若き　胸の
烈しき　温味に
生命　知れば
冷血に　驚ろき
雛鶏は　鳴きぬ。—

(下) 燈明臺

星は眼に潤味帯びて
半ば、灰ばむ空の鏡
湖面は烟り亘る。
浮巣、守れる鳰の雌雄
夢は竹生の春の宮に

夜遊の舞樂も響く頃か。
比良の山もと、里を離れ
岬、巖間に藻草、薫る—
番者、鳴の住居近く
古き燈臺、聳ゐ立てり。
—波は渦卷きいねもやらず—
どよむと覺れば四邊、靜か—

この夜、禍夢、胸に迫り
番者は闇路に血潮吐きて
悶ゆる聲音を水に投げぬ。
小さき胸甕、病入りて
三年、女主は湖を守りぬ。
圓き小窓に鳥はつどひ、

朝日、入江の水に照れば、
力盡きたる燈、消きて、
石階、しづしづ降り來る。
白き踵は霜に傷れ、
惱む歩調、杖にすがり、
苦痛はもつれし髪にみだる。
咳き、喘ぎて、窓にもたれ

小鳥の餌にと粟を投げて
深きといきに湖をのぞみ
あなやと　驚ろき、
　ついと　起ちぬ。
近く入江にたるむ白帆
見よ、　つと、　帆蔭に
艫を　離れ

若き女、乗せたる小舟一つ
狭霧、こめたる森に急ぐ。

面を伏せつゝ眼閉ぢて、
杖を力に默し立てど、
めぐれる藥の毒に似たる
唇、したゝか、黑血、流れ

やつれし双頰にたぎる涙—
ばせをの枯葉を紅にそめて
だうと倒れし窓の下に
小鳥は主公の心愁み、
悲しく羽交の浸、震ふ。
鷗は帆影に滑落ちて
森の濱なる小舟追へば

眠るが如く日光、浴びて
お嶋は巖間の苔に伏せり。
岬は人氣の聲を絶ちて
遲々たる歩みを軒に刻み
春日は竹生の嶋の梅に
鶯、小聲を弄し來る。

嘗つては　櫟の　森に　近く
母が　乳人の　館　入りに
無心の　ゐまひを　膝に　つらね、
御館の　女君は　紅白　染めの
此方に　まねぶと　數奇を　こめし
双袖　重ねて　むつび　けりや。
今はた、等しく　胸に　刻む

姿、同じき　白帆　隱れ
若き　舟人――同じ　舟子
さりや　絶望、三年　過ぎぬ。
身はこれ、さながら　菱の如く
暗き　底干に　沈み　ゆきて
死の手、冷たく、襲ひ　來り
五月雨　闇路に　朽ちし　花と

今日はも　音なく　落つる　宵か。

日は、今、鈴鹿の關を下り
疲れし歩みを重く運ぶ。
晴れたる湖上に風は和ぎて
眠れる白花、搖る如く、
蜿蜒れる渚に鷗いてふ。

春日は、比良の雪をとかし、
しづけき湖上に響き渡り、
亂れし鬢毛に光澤は失せて、
番者の主女はなげきふせり。
ばせをに連る山茶花、低う
下枝の白輪、しとと落ちて
鳥屋に伏せたる目荒籠の

雛鶏は亭午の飢に迫る。
其日、入江に綱はゆるみ、
動かず、間近に、垂るゝ白帆。

冷にたる巖の日影、生温う
水衣を流れて胸に入れば、
冷たき血潮はめぐりそめて

皷動は、かすかに亂れうちぬ。
涙に、にじみし双頰青く
光、弱げの眸、凝らし、
空の斷雲、眺め入れば、
薄き後毛、日にぞかわく。
籠をぬけたる雛鷄は一つ
飢には堪へず、主女、近う、

訴ふらむや、友は飢うと。
嶋は寄來と膝に抱き
震へる指して、若き胸の
烈しき温味に生命知れば
冷血に驚ろき、雛鷄は鳴きぬ。
毛深きひな鷄、小さき胸の

脈は血潮にあふれけらし。
甞つてはかゝりき。胸のどよみ、
あつき思にたぎる如く
許せよ、わが身も汝に似たる
胸毛の温味を指に持ちき。
さはあれ、日暮の風の如く
次第に冷たき闇に走り

凍り落つらむ時ぞ迫る。
今宵の燈を高くかゝげ、
暗き湖、照らす頃ぞ、
殘れる血潮を岩に吐きて、
吾世の苦痛、のがれ行かば、
汝はも山茶花の花の蔭に
主女見ざると嘆くらむや。

放ち遣りたる雛鶏は鳴いて、
よろめく主女の影に立ちぬ。
もたれかゝりし門の岩に
うるめる眼を船にとめて、
今宵限りの生命、知ると、
か投ぐる如く石に倒れ、

再び血潮を草に吐きぬ。
一閃、なだれて羽鼓高く
鳶はひよこを裂いて飛べど
病者は、さながら、死せるふりに
前後を忘じて岩にねむる。
山胍東へ遠く走り、
小春の日和をたゝへがほに

紫被衣を半は脱ぎて
雲は膽吹の嶺に亂る。

三の巻

(上) 紅　炎

日暮は　來れり。

(森の　梢の　裂くる　響——
鉞　打振り　斧を　かざし
百萬　阿修羅の　荒ぶ　如く
微塵に　なれかと　はたと　打てば)

鐘は　鳴れり。
鼠は族を丘に集へ、
入江の白帆を遠く望み、
今宵も舘を襲ふべしと、
低き小麥の蔭を走る。
鐘は沈みて
濁音、帶びぬ——

雲は重げに涙に流れ、
淡黄に灰ばみ低う垂れて
梟、鋭く、森に鳴けり。
鐘は濁音を
帯びて斷にず。
夜は　次第に

湖を　呑めば
小舟　ひそかに
濱を　離れ、
闇路の　眞中に
嚙まれ　去んぬ。
森の梟　三度鳴きて
雲は彼方にくづれたりや。

水棹に亂れし髪をまいて、
疾風、横さに袖を裂けば、
轟轟巨萬のやから招き、
黑雲、暗夜の水をうてり。
『甞ては拾萬、驕る子らの
軍船、屠ると戈をつらね、

西方、筑紫の灘に落ちぬ。
驕れる大湖、春の夢に
今宵は白帆も眠るらむよ。
下れ』と令じて谷を搖り
膽吹は毒霧を白く吐けば、
ものみな、こぞてと寄する如く、
大濤、逆まき、猛り狂ふ。

闇と、嵐と、雲と、霧に
波こそ渦まき高く沖れ。

森の梢の裂くる響—
鉞、打振り、斧をかざし
百萬、阿修羅の荒ぶ如く
微塵になれがと、はたと打ば

十丈、櫟の幹は折れて
轟然、舘に崩れかゝる—
昇りぬ。黒烟、渦をまきて—
厨屋は炎を闇に吹けば、
一天、雲飛び、嵐おちて
紅炎、なゝめに、なむる入江、
帆檣、碎けし難破船の

燈明臺下の岩に迫る。
坤軸、くだけと波は荒び
再び、嵐は翔り寄せぬ。

(下) 波がしら

暗がりを　打縫ひ
一艘の　難破船

横なぎに　まつしぐら、
むせぶ濤、　くるふ風。

番者は嵐に
目覺めけらし。
かゝる夜、難破の
船もあると、

石階よろめき
のぼり行けば、
紅毒蛇の
舌にまがひ
館は　火あびて——
——落つる　棟木。

＊　＊　＊

双手に巖角
確と抱き、
黒髪さかさに
闇にたれて、
あーとこそ叫ぶや
絞る如く
お嶋は血吐いて

だうと落ちぬ

＊　＊　＊

怒る濤　狂ふ風、
屈強の　若者は
血ににじむ　骸を
右、左、一人づゝ

確と　腕に　抱き　締めて
荒涙　巻來る　巖に　立つや、
『吾戀を　うばひたる
大琵琶の　龍神よ。
三人の　生血をば、
比良山の　八講の
夜嵐に　代へじか』と。

血走る　眼に　夜叉の　如く、
濤の　穂頭　はたと　睨めぬ。

銀露集

銀露集

壇の浦

白雲は動きて、
冷やかに鞍馬の
頂に懸れり。

階上に倦じて、
白髯を撫しつゝ
陰陽の博士は、
ものに、今、驚きぬ。

沓の音、衣ずれ、
橘の樹かげに、

静かなる眞晝を
式神にまゐれと、
うなだれて卜占へる
庭上の白砂に、
もの怖づる老師や。

なだれ行く白雲、

西方に垂れたり。
山茶花散る苔石、
遣水はとだえぬ。
草蕗の下風、
式神をうちのせ、
深院にまかれる。

橘の葉を揺る
式神のさゝやき、
占じ凝る老師の
長き眉動けば、
聲もなく仰ぎて、
白雲をゆびざす、
西の方。西の空。

『西方の雲氣は
冥海に動搖けり。
壇の浦、壇の浦、
西海に變とみる。』
曇り行く日輪、
つと立ちし階段

冠はふるひたり。
銀漏のしたゝり、
盤上に動いて
東北の疾風は
垂簾を蹴たりや。
殿堂のひしめき、

雜人は急ぎて
階前にさむらふ。

『西方の雲氣は
冥海に沈めり、
壇の浦壇の浦、
西海に變とみる』

たゝらかす廻廊、
落ち來るあらしに
垂簾は裂けたり。

縫針

麥の
葉風に、

御して
雲雀。

高き
み空へ
いぬと
翔る。

京の
商人、
ひろき
墾路。
喘ぎ、

喘ぎ、
荷車、
曳ける。

春を
晴着の
歌の

縫針。

丘に
とゞめて
人を
くける。

萬兩草の歌

雨やむ木蔭地の
露にぬれて
萬兩草、寂しく
孤ねむる。
胸には瑪瑙の

珠をかざり、
寂びたる日蔭に
孤ねむる。

萬象、輝く
春をひとり、
濕れるこさぢの

夢にふける。
ねびたる萬兩草—
姿さぶる
汝はこのよの
ものにあらじ。
ねむるは行者の

雲を下り、
默禱をこらせる
ふりに似たり。
けぶるき神代
嵐おちて、
裂けたる雲間の
月をすべり、

なれこそ漏りけめ
珠をいただき—

あな、あな、空より
こゝにくだり、
桂はかゞやく
額をかざる。

汝よ、せめては
吾に似たる—
小暗くくもれる
胸にやどれ。

梅雨晴

緑を漑ぎし

雲は往にて、
樹立は明りぬ。
雨は休みぬ。

小鳥は梢の
網を抜けて
嫩葉に弱き

生命循る。

葉漏りの光は
森に落ちて、
青玻璃窓閉す
室に似たり。

葉末を滴り、
枝を辷り、
はた、はた、葉蔭に
落つる雫――

生命のしたゝり、
森に浴びて、

なやむ身、暫と、
たふす樹蔭。

疲れし靈魂、
やがて蘇り、
忙しき呼吸は
胸をうちぬ――。

遠雷

双手にあふるゝ
泉うけて、
傾く白雲
影をふみぬ。
虹する夕ぐれ、

毒をふくみ、
汀にさびしく
石を鳴らす——
入江のあしまに
花は散れり。

ほほづき赤らむ

野路くれて
豫言者ぶりなる
鶉急ぐ。
きらめく流星
なだれ落ちて、
霧立つ沼べに
物を恐れ

水獺叫びて
走り惑ふ。
斜めにひとしく
ぬかを垂れて
地の上、ものみな
しろく眠る。

つとこそ出でけれ、
衣をすらし。
恐怖と苦悩の
刻むこみち—
裂きてか二つの
影を立たす。

かゝる夜犠牲來と
水沫浮けて、
入江、かけたる
月をのむや、
さらゝと急ぎて
影は消えぬ—
高嶺に動ける

雲をふみて、
雷ころゝと
遠く鳴れり。

夕ぐれ

谷をば越にて
古き城郭に
　沈むひかり、
黄ばむ林檎の
まろき胸に

生温うとけむ。
にがき涙を
人に見せじと、
まろぶばかり。
湖斜めに
雲をながめて
まどひ解けぬ。

『よき音流る』
咽喉せかむの
夜のくびき、
空と土とを
闇につながむ
時のくさり』
青き森へと

落つる『ゆふべ』の
　歌のひゞき、
消にて湖べに
古き櫓の
　影を見ざり。

夕月、ましろに

露をばたるゝ
　たかきところ、
影を現じて
淡うやぐらの
　波に浮ける。
得しはわが影
人を求めて

なやむこゝろ、
湖に沿ひつゝ
名をば忘れて
波にきける。

棕梠の花

樞戸　うつは　棕梠葉。
なゝめに　燭を　あげて
照らすを　何の　心ぞ。
黄金の　花房　はたと　落ちぬ。
塚穴　暗き　日暮、
頻りに　雨は　降りて、

飢うるが　如き　響動の
闇路を　市より　羽撃ち　來る。

彼處に　見ゆる　塚を
壞ちも　すべき　雨ぞ。
せめては　魂の　安息所—
塚穴　閉ぢよ　棕梠の

黃金の　花房　どよみ　渡る
この世と　黃泉門を　夜に　閉ぢよ。

孤螢

夜なり——罅裂けし　水泡　白沫
うな原　瞬間　夢に　隱り
捲きつゝ　相追ふ　濤と　まろぶ。
闇黑　高らか　呻き　動搖む
黃泉門の　階段　下る　如く——

燃火を　背に　夜を　縫ひ、
寂しき　磯曲の　胸に　やどり、
痛げの　羽鼓や　孤螢。

たよるは　懷——微溫き　胸の
烈しく　濤立つ　岸に　ひとり。
雨の夜　羽鼓に　光　滅び

死の波　ゆるかに　磯に　捲けば、
忽ち　砂穴の　蔭に　朽つる
青光、　あげたる　孤　螢。

野にて

空より降りし火の如く
小鳥は落ちて死にけり。
死たる床の草深く、
病みて吾も倒伏す。
風、言はず。地は荒れて

柏の蔭に嘆き倚る
眞白き君が姿のみ
淋しき胸に漂ひぬ。

丘なる墳の石暗く
涙の底に沈みゆく。
沈む日影に花朽ちて

大野の際限に雲ぞ飛ぶ。

夏草

一

夏草、野路に戀れて
ため息、熱く打靡き
雲居よりする稻妻の
雨喚ぶらしき日なりけり。

涙を雲に打乘せて
渇ける草の褥より
露の巣、風に壞れし
小鳥は遠く旅立ちぬ。

華なき徑に石焦げて
野に鳥鳴かず。蜂飛ばず

呻くは涸れし沼ちかく
死なむと喘ぐ雑草のみ。

蒼空の生命、かぎり無く
大野の極、日に熔けて、
鉛に似たる天雲の
湧きては沈む森のはか。

夏草、野路に戀れて、
ため息、熱く打靡き、
雲居よりする稲妻の
雨喚ぶらしき日なりけり。

二

傷にて草に隱れたる

雌鹿の如く打倒れ、
渇きし吾も野の草も
日向の石に面伏しぬ。

眼に溶くる雲ならば
涙と草に溉がまし。
幽かに沈む白雲の

幻影の残れれば—

朝やかゝる野の骨の
石、銀に崩るらむ。
けに陽に焼けし礫の
夏野は若き日なりけり。

今、野はあつき日盛の
呻に滿ちぬ。戀るゝ
雜草、花房、打枯れて
かゞやく露を待つ如く。

傷得て草に隱れたる
雌鹿の如く打倒れ、

渴きし吾も野の草も
日向の石に面伏しぬ。

三

倒るゝ如く臥す如く、
明く熱く渴く野に、
喘げる草の呼吸あらき

吾世の夏は來りけり。

野に穫し百合根苦かりき、
闇路ふむこそ、よかりけめ。
心地死ぬべき眞晝野に
何しに來つる吾ならむ。

げにこそ雲は馳なやみ、
また森影に沈みゆく。
探ぐるに遠し、野の極、
想像の羽をのばせども。

鬼菱の夢

雲の佇む東の
森の沼なる隱妻、
覓めてや鳴く、
五位鷺の。

秋の日薄く傾きて

光、寥しき野の上に
水銀に
輝きぬ。

風、冷かに霜落ちて、
か弱き枝は梢より、
七重の衣を

剝れたり。

剝れし衣うち被ぎ
惡魔の如く沼の底に
結ぶは鬼菱の
暗き夢。

水に浸れる白雲は
醒めざる夢を打乘せて
御空の限
遠くゆく。

若女の夢、鬼菱の夢、
九月秋の沼をいで

うつらと星に
上りけむ。

殘れるものは黑菱の
凍らむとする沼水に
朽ちて果つらむ
骸のみ。

『夕の霜の
薄くして
船やる術は
知れれども
採らむ子故に
棹さゝじ』

『怪る勿れ
吾友よ。
一日の糧を
此沼の
水に求むる
舟夫にして』

『刺ありと知る
なきがらの
菱はあまりに
固ければ
君が痛の
つらからむ』

木實採る子と惑ひけむ。
寥しき沼に舟求めて
水面の月に泛ぶべく
呼べども、人の
應へざる。

病狗

まろき礫、樂しげに
朝の銀盃凝視れば
日は燦かに樹幹の
露にはとびて流れけり。
白光する羽折れて

燈籠の蛾の夢さめず。
つひに醒めざる骸の
祠の階に伏惑ふ。

ほのぼの明くる夢の朝
現とも無く打病み、
獣ひとつ石垣の

崩れし蔭に倒れ居る。

曼珠砂華咲く地上の
微動ふ背の荒毛より
苦悶を乗せて朝雲の
静なる界に急ぐらむ。

影繪にて見む侏儒らの
躍れる闇を離るべく
朝の靈に羽あげて、
病狗よ。呼吸の管
閉ぢよ。
忽ち土に鐵輪の

轟く響、いくたびか
胸の燈火、消さむとして
恐怖の脈をたかめけむ。
（靜かに靈に羽あげて
獸よ。汝の耳垂れよ）
百萬、肉に封じたる

生命の、扉うち開き、
放たば、紐、斷切れて
微房をや靈の離るらむ。

ひとつびとつの扉より
斷れつゝ絲の皷鳴てば
生命の微房にまたひとつ、

死をこそ刻め、苦悶もて。

見よ、薄白く天日の
か漏らす温味うけながら
崩れて消ゆる銀の
露の盃、さしおきて
病みにしものは醒もせず。

日輪の
光は生温く
落つれども
笞ぞ秋の
無情きに
枷を離れし
和魂の

雲は山にや歸りけむ。
銀盃、草に擲つて
帛裂く如き秋の風
冷たき肉を鞭うちぬ。

汝が伏すところ、

無限のよそに
　翼せば
せめては神の
　慈まむ

(静に靈に羽あげて
獣よ、汝の眼を瞑ぢよ)。

宇治橋のほとりにて

礫を闇に降したる
螢は海に流れけむ。
透せば水の鮮かに
磨ぎて瘦せたる鱗の
摩れもやすらむ櫻葉に

躍りて下る宇治の橋。

夕月白く照らす頃
蛇籠に睡る石伏の
夢より淡き茶の花に
行紛れたる魚狗の
やゝともすれば夢をはむ

瀨も住むめり、砂の上に。

白き落羽を打のせて
水は淺瀨に騷げども
凋れし葦の露散りて。
白鳥鳴かず。草家の
痩せたる妻を呼ぶものは

筏を流す人にして。

憩ひがてら、薄日さす
草は濕れど栗の樹に
想ふ人、舍人して
馬を曳かせず。滋藤の
弓、打物を有ねども

面影に見る磨墨よ。

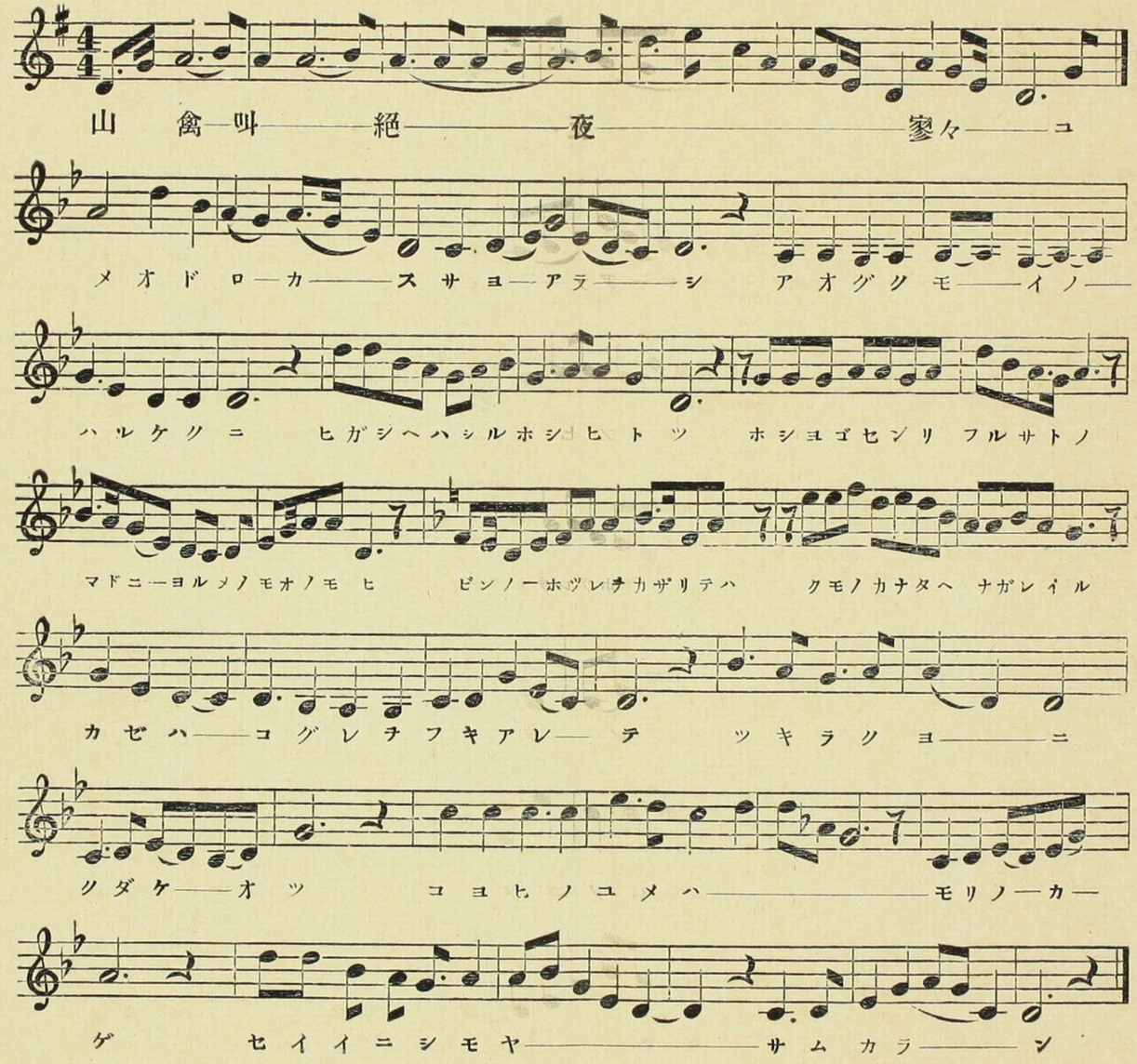
菱の刺

宇治川に程近き沼なる菱の果を饗せられ、誤つて其刺にさゝれし指の血を、主人には隠せりしのを、眼敏くこれはと問ひつめられて言ひ吃る

唇に
觸れで流れし
湖の、
菱にしあれば、
沼の神
心無き子を
物蔭に

笑はむとする
刺にして、

林下のたむろ


山 禽 叫 絶 夜 寥々 ユ
メ オ ド ロ カ ス サ ヨ ア ラ シ ア オ グ ク モ イ ノ
ハ ル ケ ク ニ ヒ ガ シ ヘ ハ シ ル ホ シ ヒ ト ツ ホ シ ヨ ゴ セ ン リ フ ル サ ト ノ
マ ド ニ ヨ ル メ ノ モ オ ノ モ ヒ ビ ン ノ ホ ツ レ チ カ ザ リ テ ハ ク モ ノ カ ナ タ ヘ ナ ガ レ イ ル
カ ゼ ハ コ グ レ チ フ キ ア レ テ ツ キ ラ ク ヨ ニ
ク ダ ケ オ ツ コ ヨ ヒ ノ ユ メ ハ モ リ ノ カ
ゲ セ イ イ ニ シ モ ヤ サ ム カ ラ ン

林下のたむろ

山禽叫絶夜寥寥
ゆめおどろかすさよあらし、
あはぐくもるのはるけくに、
ひがしへはしるほしひとつ。

はしよ。でせんり、ふるさとの、
まどによるめのものおもひ、
びんのはつれをかざりては
くものかなたへながれいる。

かぜはこぐれをふきあれて、
つき、らくにふにくだけおつ、

こよひのゆめはもりのかげ、
せいいにしもやさむからむ。

隱家

吹けども、風に動かざる
月は懸りて空にあり。
筑摩の小野はうら枯れて、
流離ふ人の影に似る
白雲、湖をよぎりけり。

吾家は栗の森隱れ、
湖近く窓にみる
枯葉のあしに浪寄せて
眠るは白き鷗鳥—
威せど岸を離れざる。
底澄み渡る湖に

氷魚の夢や白からむ。
高嶺の裾に風落ちて
雪も輝く頂に
月さへ冴ゆる夜半なれば。
凍りて底を
封じたる

舟を押せども
砂の上に、
軋らず、鳴らず。
轉ばねば、
水にも舟の
浮かずして。

吾家は岸の森隱れ、
孤獨になれし隱家の
夢には月のたりぬれば
舟を流さず。鳥追はず。
霜にかねなむ狹筵の。

—銀絲の　みだれか　雲は　細く
もつれて　散トぬ。御空、高嶺、
冬の陽　徐かに
嶺を　下り
湖　ふぎりて
西に　動き—

杉の歌

上

彼方、市なる白き甍
人は霜夜の夢に覺めて、
駒鈴の響に咽びかへる
鈴關、樹葉は谷に朽ちて、

七寶青磁の銀に似たる
御空の星影みだれ隕ちぬ。
譬へば都の春を戀へる
流人か。朝空、枝振高く
曙光浴びたる杉の立樹、
曉霧に旅なる頭垂れて
老しは祈禱の聲をあげぬ。

ああ見よ、日の影額に刻み
曝せる霜夜の傷に照りぬ。
古き痛手を胸にとめて
双肌あらはに北に向ひ
鈴鹿に間近き岩に立てる
十丈、杉樹の冠裂けて

眞北の嵐におらぶ魂の
動揺に恐怖く里の長や。
一日、怖怖、甕を運び、
神主、祝部、土に伏して、
あざける杉樹に注連を結ひぬ。
靈ぶる王者は降れる霜の

險しき面輪に峠高く
渦巻きのぼれる谷に白き
雲には懈怠をなぢる如く、
双肩なゝめに朝日あびて
大なる影身を空に投げぬ。
（生存、くるしきいくさ勝ちて、
手傷の種子を土にまきぬ――）

根瘤の周圍に樹立青う
かくてゞ生ひたる族立てり。

西方、湖國、平野あれて、
古き郭壁は土にすたる。
さはあれ、湖、生命盡きず、
動ける形象を胸にうかべ

烏こそ疲れし羽根をまげて
蒲生の小蔭の夢に耽けれ。
南方、山脈、遠く走り
嵯峨ゆる谷を越にて
古き都に雄鹿鳴かば
殿堂、み冬の香、漏れむ。

こゝや鈴鬨、雲をふみて
むらだつ冬樹の骨立つ中に
雄々しき姿ぞ、幹は裂けて
朝日におごりて聳に立てる
古代杉樹の枝振すねて
霜夜の健鬪、ほこる如く
伊勢路を横手に示す振よ。

み冬の嵐は氣比の海の
立石岬に潮卷きて
白雪礫を飛ばし來むや。

下

靜けきみ谷に走る獸、

か弱き冬光は震帶びて
中空、雲間を白く垂れぬ。
眞晝、鬪爭の苦痛忘れ、
下界の平和を守る如く
杉、今、日浴びて默し立てり。
斧振る杣人、眞弓執りて
獸を追ひしか、山に疲れ、

鼾聲、たからか、夢に入れば
あざけり顏なる小杉樹立。

豫言者、眞白き頭ふりて
戰鬪、勝てる子、さとす如く
熱き涙を土に垂れて
老樹は獵夫の夢路搖る。

杣人疲勞と驕る胸に
『花咲く巖根にたぎる清水—
くらがり眞洞にくだり行きて、
烈しき流にまかれ去る』と、
ゆめみて、み冬の杉樹仰ぎ、
恐怖きおそれて急ぎ去れば、
見よ、あな、天路を走る雲に—

(霰は老樹を
みだれ擊つよ)
たみたる聲音を空にあげて
杉樹はしづしづ搖ぎいでぬ。
礫あられのどつとうてば
白雲、崩れてどよみかへる。

轟轟、山鳴り、樹立ゆるぎ
谷、また、林をあらび來り
眞北の荒風、まいて去んぬ。
悲鳴あげたる冬樹、枯枝
深山伊勢路になだれ入つて
冬眠は再び土にかへる。

銀絲のみだれか、雲は細く
もつれて散じぬ御空高嶺
冬の陽、徐かに嶺を下り、
湖、よぎりて西に動き
嚴上、古代の杉樹射つゝ、
み冬の平和を祈る如く
頭上の冠、白く飾り

戰神、汝のつとめあらば、
やすかれ、暗闇、眞晝ならじ。
靜かに臥せよと高く榮にぬ。

磯曲に

磯わにうらぶれ
涙しながるゝ
白日の旅路。
砂すく女も

病ありやと、
迫り問ふに、

（耄けたる冬日に
映れる面輪を
湖に指しぬ）

めざめて

めざめて冬樹の
夢をし揺れる
霜の洞。

双翼凍りて

鶯小歌

朝に絶にき。

（溜息熱きを
冷たき胸戸に
吹いて入れが）

海の歌

闇と光の
翼のべて、
海は綱げる
鵬に似たり。

羽擊つ　力も
瞋る　蹴爪も
綱に　ひかれて
足搔く　ばかり、
われと　わが世の
土を　嚙みて、

時の　流に
孤　呻く、
または　倏忽
滅ぶ　如く
白き　頭を
なかば　垂るゝ。

あはれ　藝術と
　人の　夢は
小さく　小暗き
　穴に　いれど。
しばし　大なる

夢に　ふける
海よ　あやしき
　鵬の　鳥よ。
走る　幻
　うつら　夢の
羽搏つ　縱横、

際限を　知らず。

生くる　血の如
温く　めぐり
脈はも、鳴りうつ
潮の　流。

實にこそ　永久より
永久に　生きて
肉は　火宅に
靈を　つかむ。

海の　戰鬪
そこに　動き

遂に　疲勞れて
こゝに　眠る。

羽搏つ　九萬里
土を　壞ち
地に這ふ　有情を
冷笑ふ　如く。

綱ぐ　地の軸、
肉の　きづな
永遠に　斷たむと
雲に　咆ゆる、
海よ。あやしき

鵬の鳥よ。
かくて瞬間、
うつつら夢か。

銀露集　完

明治四十年一月二十日印刷
同　四十年一月廿五日發行

正價金六拾五錢
郵税金拾錢

著作者　澤村胡夷

發行者　京都市上京區寺町通二條下ル十三番戸　河合卯之助

印刷者　京都市下京區白川筋三條下ル東入ル五軒町第三十八番戸　笹川延太郎

印刷所　京都市上京區柳馬場通二條下ル等持寺町十番戸　京都印刷株式會社

發賣所　京都市上京區寺町二條下ル　文港堂書店

不許複製

賣捌所　東京　東京堂　東海堂　森江英二
大阪　杉本書店　小谷書店　名古屋川瀬

豫告

澤村胡夷作
詩集
五月雲
近刊

澤村胡夷作
詩集
蝦夷の花
近刊